

世界の著名な特許にみる ————— 第2回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

特許王エジソン その1



科学&知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

1. はじめに

第一回はエジソンの発明事業について取り上げます。全米発明家殿堂第一号であり、全米発明家殿堂入りで授与されるメダルに、歴代大統領評価ランキングでしばしナンバーワンに上げられる第16代大統領リンカーンと並び刻まれた人物です。1093件に及ぶ最多数の米国特許を取得し、数々の事業を立ち上げ、20世紀の産業発展に寄与した同時代を象徴する人物とも捉えられています。試しにネット上で「発明 (invention)」「エジソン (Edison)」のイメージを検索したところ、「電球のマーク」で表示されることが定番であり、現代においても反射神経の如く万人の脳裏に浮かんでいることになります。これほどまでに世界中の人々…人類と言っても過言ではないかもしれません、その記憶に刻まれた発明家はいないと思われます。著者を含め多くの方々にとって、エジソンは子供の頃に「偉人伝」、「科学・発明」類の本として読んだ記憶があるもので、その記憶もおぼろげであると思われます。本連載のテーマではそうしたベース

に、世間で殆ど知られていない情報の補強を加え、「発明事業」を行うに当たり必要な知識と資質はなにか、という新機軸から、現代にも通じる普遍性・ルールを見出すものとなります。天才と称される生き方、成功と称される事業も、人間が成し遂げたことである以上、そこに不可能はなく必然性があるという考えに沿って、等身大の生身の人物として書き進めたいと思います。

2. エジソンの発明事業



Thomas Alva Edison

出展：The National Inventors Hall of Fame

エジソンが関係してくる発明事業をみると、「電信・電話関係」、「白熱電球・発電・

送電システム・蓄電池・交通関係」、「鉄鋼・セメント関係」、「フォノグラフ・蓄音機関係」、「映画関係」等が挙げられます。これらの発明品の数々は、他の発明家や事業家との間で熾烈な戦いとなり、開発競争や特許訴訟、企業買収等が繰り返されていきます。

今回は、エジソンがどのような人物であり、そうした人物が紆余曲折を経て、職業発明家として名乗りをあげ、最初の特許製品を世に出し独り立ちを決めるまでの約20年「発明家としてのスタート」を書きたいと思います。それから10年後にエジソンは「メンローパーク（ニュージャージー州にある小さな村の名前）の魔術師」と呼ばれるようになるのですが、次回以降は、そのメンローパークに研究所を建設するまでの経緯と、その後に同研究所で続々と誕生していくエジソンの前半生における電信・電話・白熱電球・発電送システム・蓄音機という、世界を一変させる驚嘆に満ちた発明事業を中心に進めます。続いたの舞台はメンローパークから移り、ウエストオレンジに新設した研究所において、後半生における映画や音響機器関連といった新産業に繋がっていく事業内容を中心に見ていきたいと思います。ちなみにエジソンが書き残した膨大な実験ノートだけでも350万頁に上り、また本人や後世の人物の著によるものでも内容に揺らぎ（不正確、誇張、疑わしい事実等）が含まれていることが認められており、人物伝の詳細及び各事業の各技術詳細の正確性の担保についてはご容赦願いたいと思います。本連載では、木を見て森を見ずということにならないよう、可読性を重視し、大所高所、科学史・産業史の大きな流れの観点から、当時の技術・社会常識と時流を踏まえ、その条件下において、いかにして発明事業を成し得たのか、現代にも通じる、モチベーション、インスピレーション、イノベーションの大きな種、ヒントを示せるような構成としたいと思います。

尚、今回の副題を、「特許王エジソン」としたのは、エジソンが単に発明をして終わり

にするのではなく、特許にすることで強力に発明事業を成していったことから名付けました。ちなみに現在では企業研究所、企業内研究開発部門は当たり前の様に存在していますが、そうした体制を作った初めての人物であり、知財戦略のはじまりの人物とも言えます。

3. 生き方の進路を決めたもの

一般に進路ですが、家業を継ぐことが決められていたり、飯の種で始めたものであったり、あるいは幼少期や青年期で出会った人物もしくは本やテレビやネットニュース等から大きく影響を受けたものによって自ら決めたりするものでしょう。誤解をおそれずに言えば、大発明家エジソンの進路を決定付けたものは、「自然と実験の哲学」と「ファラデーによる書籍」との出会いではないか、と思えます。（ちなみに、筆者は大の好きで少女期にレオナルド・ダ・ヴィンチらルネサンス科学芸術、手塚治虫先生の薫陶を受けた一門の科学マンガ、水木しげる先生の文化人類学系等の作品にのめり込み、青年期は「電子立国日本の自叙伝」に感銘を受け、電子技術総合研究所に入りました。）さて、エジソンは終生に渡り猛烈な読書家だと知りました。書店の棚ごと買い付けるほどで、エジソンの研究所の図書室には一万冊を超える蔵書があり、これが数々の事業構想の源となったことが記録資料より読み取ることができます。ちなみに、徳川家康も読書家で私設図書館を持ち出版事業まで行っていました。なぜ家康公を出したかという、国家の産業発展や社会制度体制の検討、国家事業開発という観点から同じことではあるのです。

さて、では簡単にエジソンの幼少期から青年期までを駆け足で紹介したいと思います。